座談会

「避難、そのとき

東日本大震災発災から二次避難までの町の動きを、当時避難の指揮にあたった担当者を集めて振り返った。

3月11日 14時46分 発災当時の町の動き

（山本）　私はあの日、浪江中の卒業式に参列後、自宅にいました。地震直後、役場に向かったのですが、国道114号とJR常磐線の陸橋が損壊していて、やっと通行できたのを覚えています。役場の様子はどうだったんですか。

（上野）　私は町長室で総務課長と打ち合わせをしている真っ最中。壁に叩きつけられるようなものすごい揺れだった。

（根岸）　町長室にあったテレビはひっくり返るし、飾ってあった大皿は落ちて割れたりと、とても立っていられる状態ではなかった。

（谷田）　確かにいつもとは全く違う揺れ方の地震でしたね。普段の地震ならガタガタという小刻みな揺れ方だけど、あの時は1mぐらい一気に横揺れする感じでした。

（上野）あのときはちょうど議会が開かれていて、議長や副議長、議員も対策本部に駆けつけてきた。こちらから要請しなくとも、消防団、警察、夜には自衛隊が集まってきて合同対策本部が立ち上がった。とても役場だけで対応できるような状況ではなかった。

（根岸）　私も所属の部下たちに、避難誘導や町内の被害状況を調査するよう指示しましたが、請戸地区に向かわせた職員は津波に追いかけられる感じで帰ってきました。その職員は棚塩地区の方だったので、津波で自分の家が流されていくのを見たって。本当に生きるか死ぬかの瀬戸際のところだった。

（髙野）　防災無線が鳴りましたよね。はじめは確か3mの津波という内容の無線だったと記憶しています。

（谷田）　当時の状況を書いたメモを残しているのですが、はじめは午後3時半過ぎぐらいに築場で3mの津

私たちは。」

波という情報が入ったんです。その後、町内の家が倒壊しているとか、国道114号沿いの店舗が一部倒壊しているとか、そういう情報が断片的に対策本部に入ってきました。

（上野）　1回目の対策本部会議を終えた後、馬場町長は自ら町内の倒壊している家々を見てきて、「これは大変だ」と言っているうちに津波の情報が入ってきた。あのとき一番不安だったのは、請戸小の子どもたちが行方不明になったという報告。実際は大平山沿いに避難して、途中トラックの荷台に乗せられて避難できたんだけど、安否の確認が取れたのは確か夜7時頃だった。みんなで胸をなで下ろしたことを覚えている。児童館の子どもたちが、いこいの村なみえに避難したという連絡が入ったのも同じぐらいの時刻でした。

（根岸）　これはいつもの地震ではない。私が災害の大きさを実感したのは、警察から遺体安置するのに体育館を使わせてほしいという要請が入ったときです。どれだけ津波の被災者がいるのかと思いました。

（上野）　私のところにも体育館を貸してほしいと連絡が入った。津波が来て何時間も経たないうちにこんなに亡くなることが本当にあるのか…と。

（谷田）　あのとき対策本部には、東中学校の近くまで津波が来ているとか、南棚塩地区や請戸地区のほとんどが津波でやられているといった被害の報告が中心でしたので、人的な被害については夕方まで誰も把握できていない感じでした。

（上野）　そうでした。被害状況が分からないまま夜になってしまって。幾世橋小には、請戸地区や棚塩地区の人たちが避難していたんだけど、収容人数が全然足りないから「サンシャイン浪江に避難してください」「毛布があったら出してほしい」とマイクでお願いした。あのときは余震が何回もあって、天井からバラバラとコンクリートの破片が落ちて危なかった。役場庁舎にも、廊下や空いている部屋に避難者があふれかえっていた。みんなコートを羽織って、数着の着替えを持ってきている程度。誰もが一時的な避難のつもりだった。

（髙野）　私は津波が襲った請戸の現場を見に行きましたが、周囲も真っ暗闇で持っているLEDの照明も遠くまでは届かなくて。ただ、呼びかけると反応するんですよね、私の声に。瓦礫の下で間違いなく生きている人がいる。すぐに災害対策本部に戻って報告したのですが、二次災害を避けるために明日の朝早くから救出しましょうということになって。やむなく、私たち消防団は諏訪神社に50人ぐらい取り残されていると聞き、そちらの救助に向かいました。

（根岸）　瓦礫が多くて身動きが取れなかったのでは？
（髙野）　はい。瓦礫もそうですし、道も寸断されていて。倒れている木を乗り越えたり、下を潜ったりしながら進みました。現場は津波で入口付近の道路がえぐられていて足場が危険な状態で、安全に通れるように整備しました。周囲は真っ暗闇で、諏訪神社からの道のりを照明で照らしながら住民を避難させました。自衛隊も来てくれて、身体の弱い人を背負ったり、抱えたりしながら救出してくれました。それから役場に帰ってきたのは、夜中の３時半頃でした。
（上野）　翌12日の朝、馬場町長がテレビを見ていて「避難指示だか、避難命令を出しているぞ、半径10km圏外に逃げろ」という話になって。浪江町も津島に急遽避難することになり、救出活動は早々に打ち切られ、津波の被災者を救出しに行くことができなくなってしまいました。
（髙野）　本当に悔やまれます。震災前の3月9日と10日の地震のときにも津波注意報が出ていて、請戸の消防団は両日とも出動していました。しかし、津波警報や注意報が出ても、実際は50cm以内で収まることが多いため、住民もいつの間にか警報に慣れてしまっていた。
（谷田）　私が住民生活課にいたとき、津波避難計画を立てたことがあるのですが、そのとき想定した津波は最大で6.4mだったと思います。川から海水が逆流してくるような浸水を想定していました。「堤防を越えてくるような大津波は来ない」という認識でした。
（髙野）　でも、実際は壁のような津波が襲ってきた。あのとき消防団も防波堤沿いに広報活動をしていましたが、国道6号が渋滞していました。団員の一人は、車を降りて窓を叩きながら「津波がここまで来るから降りて走って逃げろ！」とドアを叩きながら言って回ったんです。しかし「こんなところまで津波が来るわけがない…」と思った人たちは、帰らぬ人となってしまいました。

町災害対策本部の会議の様子（町役場庁議室）

町役場での避難の状況（3月12日）

3月12日13時
津島支所への災害対策本部の移転が決定
（3月15日まで）

（上野）　私は先遣隊として津島へと向かったものの、国道114号は避難する車で数珠つなぎだったので、途中、石井商店の裏手を回って津島支所へと向かいました。結果的に、到着するまで4時間近くかかりました。

（根岸）　あのときは地元のバス会社の皆さんが自主的に役場に来てくれて、津島に住民を避難させてくれた。
（山本）　役場からバスが出ることを広報しました。役場の鍵を閉めたのですが、その後も結構な人数が役場に来たことを覚えています。

（谷田）　私は3時ぐらいに役場を出て、津島に着いたのが夜8時半ぐらい。あのときは津島の小・中学校などに避難者を収容し切れなくて、車の中で過ごす人もいたという報告もありました。

（髙野）　12日の午後は苅野の公民館で炊き出しをしていました。その最中にボンって音を聞いて。「何だ今の爆発音は？」となって、団長は屋内退避の指示を出しましたが、せっかく作ったおにぎりや味噌汁など貴重な食べ物を無駄にしたくないので、苅野小学校体育館に運び込みました。
（上野）　向かった先の津島では、着の身着のままで避難したものだから、誰もお金なんて持っていない。炊き出しのための米を購入しようとお店にかけあっても、「放射能がある所には配達したくない」なんて話も

避難者受け入れ準備の様子（津島地区）

出たりして。結局自分たちで給食のトラックを運転して米を購入しに行きました。

（山本）　津島では地区の皆さんが食材をはじめ、段ボール、石油ストーブなどをわざわざ避難所まで持ってきてくれて助かったのですが、トイレがどこもいっぱいになってしまい大変でした。最終的に消防団が穴を掘ってくれて何とかなったのですが。「大災害時、集会所や公民館などが避難所になったとき、トイレの数は十分に足りるのか」というのは、私たちが得た貴重な教訓でした。

（上野）　避難先では、薬の問題もありました。あのときは薬も持たずに避難した人が多く、診療所の先生に対応してもらったものの、中には自分が何の薬を飲んでいるのか分からない人もいて、問診時間が長くかかったことを覚えている。

（山本）　診療所でも薬が足りなくなって、先生から指示を受けて、私は薬の調達班として中通りに向かいましたが、携帯電話が通じず、薬局の場所が分からなくて郡山・福島間を右往左往したのを覚えています。

（谷田）　あの日は寒さも厳しかった。避難所には新潟県から毛布が2,000枚ほど届きましたが、それでも全然足りなくて。津島地区の個人宅からも随分出していただき本当に助かりました。

（上野）　津島では南相馬市や大熊町の人とか、お互い顔も名前も分からない避難者がどこの家にもいっぱい泊まっていた。役場も避難者の数を把握できるような状況ではなかった。

（谷田）　津島地区内で避難所から避難所へと動く人、県内外へ避難する人など、それぞれの動きがあまりにも速すぎて個人の避難先を特定できるような状況ではなかった。避難先のメモが残された場所に行ってみると、すでにそこには誰もいないことも多くありました。

（根岸）　お互いの連絡が全く取れない不安な状況がずっと続きました。避難しているとばかり思っていた救護施設「浪江ひまわり荘」、特別養護老人ホーム「オンフール双葉」の人たちが、実は現地で孤立していると分かったのも、その一つです。対策本部でも県と連絡を取ったのですが、救助の連携がうまくいきませんでした。

（谷田）　私と根岸さんの二人でオンフール双葉の様子を直接見に行きました。真っ暗な中、玄関で毛布を被った年配の方が震えるようにしていました。最終的には自衛隊、県警のバスで避難させることができました。

（上野）　あのときは携帯電話もほとんどつながらない状態。県の災害対策本部に連絡して衛星電話を手配し

たものの、届いた電話は１台だけで、しかもつながらなかった。あまりにも連絡が取れないので、「浪江の住民が消えた」という話が周囲から出たぐらい。避難して来た人たちをバスに乗せて津島から南相馬市の原町に移動したときに、ようやく電話回線が復旧したのか、携帯にズラリと着信履歴が入っていて驚いた。

３月15日、二本松市への避難を決定 東和支所に災害対策本部を移転

（上野）　15日には他の市町村の避難の状況などもようやく分かってきた。馬場町長と話をして「避難指示は出されてはいないが、この先どうなるか分からないから受け入れ先を探そう」という話になった。

（髙野）　放射能のことが話題になった時期だから、受け入れ先の調整は難しかったのではないですか。

（上野）　朝早く馬場町長と吉田町議会議長が二本松市に向かって、三保市長との話し合いの場を設けて、すぐに受け入れの話が決まった。すぐ避難場所を準備させるからって。 10カ所ぐらいあっという間に手配してもらいました。

（根岸）　この話を馬場町長が二本松市に出したときは8,000人を避難させるという内容でした。実際に避難した町民は3,500人でしたが、二本松市の対応は本当に速かった。三保市長も8,000人が二本松市内に避難することを想定して、県職員に協力を求めたようでした。

　朝10時頃に区長さんなどを集めて、津島から二本松へ避難することを伝えました。本来であれば、15日の午後から避難者を順次振り分けていく予定だったのですが、午前中の時点で町民にその話が伝わってしまったため、避難者が二本松市に殺到してしまい、二本松市役所での対応は大変な状態でした。

（高野）　町民には少しでも遠くに避難したいという心情もあったのかもしれません。

（山本）　その一方で、まだ浪江地区から避難していない人もたくさんいました。町営住宅に住んでいる方は、玄関をドンドン叩いても出てこないんです。自衛隊の方と一緒に避難を勧告したのですが、ペットが一緒だから避難できないという人もいました。

（上野）　二本松市としては、受け入れにあたって駐車場が広い東和支所を避難先に選定したわけですが、その連絡が津島の対策本部に来る前に浪江町民は二本松市役所に行ってしまった。あのときはバスの手配なども大変でした。

（谷田）　バスは当初県外のバス会社にも依頼しましたが、原発の20km圏内と聞いて、運転手が引き返したこともありました。人や荷物を運ぶためのバスやトラックも必要になると思い、県の災害対策本部を通して手配したのですが間に合わないため、二本松市内をはじめ、近辺の業者さんを電話帳で調べて片っ端から電話をしました。民間のジャンボタクシー、マイクロバス、町のマイクロバスなど６～７台が集まりました。

（根岸）　大熊町や双葉町などは、国からの情報がある程度入っていたようでしたが、浪江町には情報が全く入りませんでした。バスの手配もそうですが、浪江町

町役場二本松事務所（二本松市役所東和支所２階）

の震災避難の初期対応は他の自治体と全く違うものでした。

二本松市役所東和支所の方から、避難者からの問い合わせに対応できる人を配置してほしいという要請があり、上野副町長と私の二人で東和支所に向かいました。東和支所の２階を事務所としてお借りしたのですが、ひっきりなしに浪江町民からの電話が鳴っていました。

（山本）　電話は「東和支所にどうやって避難すればよいのか」という内容が一番多かった。大手通信事業者から避難者にタブレットを配付してもらってからは少し落ち着きましたが、それはずっと後の話です。

（上野）　東和のときは、町民の不満が日に日に増していった。１日ぐらいの避難だと思っていたら、３日も４日も避難所にいるわけだから。役場ができることと言えば、３食出すので精一杯という状況だった。支援物資が全国から届けられ、消防団と町職員で東和支所の室内ゲートボール場に収集運搬トラックからの積み荷を降ろしたり、各避難所に配送したり、昼夜を問わず大忙しだった。

（山本）　当時、班編制の指揮を執っていましたが、町民に提供できる情報が圧倒的に少ないことが一番の悩みでした。

（根岸）　ネット環境が整備されたのは、福島県男女共生センターに対策本部を移してからだったと思う。

（谷田）　一人平均５～６回は異動していたのでは。避難者は「何も分からない」「情報が入らない」と言っていましたが、役場には出せる情報が何ひとつない状況でした。避難所には新聞も届いていなかったため、東北電力の方にお願いして原発に関する新聞記事を切り貼りして、職員に配ったりしました。

（根岸）　もし仮に新聞が届いていたとしても、それを読む暇もないほど騒然とした状況でした。役場職員はテレビを見る時間もないほどでしたから。そうした中、ストレスが高まってきたんですね。避難者同士の関係がおかしくなって、トラブルが急激に増えました。

（山本）　役場職員のストレスも相当なものでした。うつ病や高血圧になった人も多く、中には業務の途中で倒れて、救急車で運ばれた職員もいました。

（上野）　あの時のことを思い出すと本当に辛い。トラブルに対応する職員の数も足りなかったし、電話で不満を訴える人もたくさんいて、役場職員はその対応にずっと追われていた。寝るときも床に毛布１枚敷いて寝るだけだから、疲れは全然取れない。目が覚めたらすぐに朝５時半から会議を開いて、活動を開始していた。業務終了は夜の８時と決めていたものの、携帯電話が四六時中バンバン鳴ってとても休めるような状況ではなかった。風呂はだいたい週に１回で、カミソリもないから髭を剃ることもできない。男はみんな髭で真っ黒だった。寝ている時以外はみんな仕事をしている状態だった。

（山本）　そういえば、あのとき馬場町長も髭を伸ばしていましたよね。

（根岸）　馬場町長も髭を伸ばして周囲から苦情を言われたけれども、請戸の町民への想いがあったものだから、慰霊祭の前日まで髭を剃らなかった。

（谷田）　二本松の避難所では地域住民の皆さんにだいぶ助けてもらいましたよね。

（上野）　そうだった。避難所の戸沢地区の体育館は隙間風が入ってきて本当に寒くて。ストーブがたった１つしかなくて、ガンガン燃やすと周りにいる人は熱くていられないし、そこから１ｍも離れると寒くていられないという感じで困っていたんだけど、地域の人にお願いしたらダンボールを持ってきて隙間風を塞いでくれてありがたかった。

（根岸）　東和に避難して一番困ったのは、浪江町が警戒区域に指定されたとき。浪江町に戻りたいという町民の対応に追われました。ペットを家に残している人が結構いて、こちらとしても何とかしてあげたいけど、許可を出せない状況で苦慮しました。

（山本）　あのときは全国から避難所に支援物資が次々

町役場二本松事務所（福島県男女共生センター）

と届きましたが、不公平感が出ないように17カ所の避難所に分配するのは、だいぶ苦労しました。何しろ体育館ひとつ分がすべて埋まってしまうほどのすごい量でしたから。本当にありがたいと思う一方で、避難者が「今すぐほしい」という物資が全然手元になかったりして歯がゆい思いもしました。

（髙野）　避難所では男性が大抵分配を仕切っているから、女性の方が困っていましたね。たとえば赤ちゃんがいる家庭とか。避難所を運営するときは、女性職員を入れて物資の分配・整理をしないと、うまくいかないと思いました。

（上野）　ボランティアの皆さんにも助けられた。中でも、東北電力の皆さんは災害当初からずっと寄り添って浪江町を支援し続けてくれて。あのときのことを思い出すと、感謝の気持ちでいっぱいです。

4月5日～
磐梯山周辺、岳温泉、土湯温泉など中心に二次避難所が開設（～11月末閉鎖）

（谷田）　町民がホテルやペンションに避難したのは、４月上旬あたりからになります。東和の避難所では疲れも残って大変ということで、県でホテルやペンションなどを二次避難所として手配しました。他の自治体では会津の東山温泉など１カ所にまとめられましたが、浪江の場合は裏磐梯や岳温泉など、二次避難先の数がホテルとペンションを合わせてピーク時には200カ所以上にもなって、避難した市町村では一番多かったと思う。みんなバラバラになってしまった。

（根岸）　誰がどこに二次避難するかについては、東和に常駐していた旅行代理店の方に機械的に振り分けを決めてもらいました。

（谷田）　４月の寒い時期でしたから、裏磐梯のペンションに避難した人からは「こんなところに置かれてどうするんだ」と大騒ぎされたこともありました。それに避難先での食事の内容に違いがあったりして、避難者同士で連絡を取り合って避難先を変えていた方もいて、役場も避難者を把握できない状態でした。

（上野）　二次避難の時期になると、知らない土地で高齢者が買い物や病院に行く手段がないという新しい問題も出てきました。

（谷田）　それについては、受け入れ先の市町村でバスやデマンドタクシーなどを出してくれたところもあって、本当に助かりました。避難先のホテルが週に何回か車を出してくれて、買い物や医療機関に高齢者を連れて行ってくれたということもありました。

（上野）　避難先、特に二本松市の皆さんには本当にたくさんのご助力をいただいた。あの頃を振り返ってみると、避難に次ぐ避難の疲れ、浪江町を離れざるを得ない寂しさ、放射能への不安など、本当に辛いことばかりだったが、あのとき、私たち浪江町民に温かい手を差し伸べてくれたすべての方々に、この場を借りて感謝の気持ちを伝えたいと思います。

――――ありがとうございました。